

「浙江大学スプリングスクール参加報告書」

京都大学教育学部・2年 (菊地 玄)

本プログラムは中国語初級者から中国語を実用的に使うことができる者まで幅広いレベルの人々が中国文化を楽しみ、学ぶために役立つものであったと思う。実際今回のプログラムに参加した人々の志望動機や中国語のレベルはさまざまであった。私は文系で中国語を2年履修していたにもかかわらず、話すことができるかなどもつてのほかで講義の内容など右から左に抜けていっていた。そのような私にとって中国語を現地で学ぶことができることはモチベーションをあげるためにいい機会であると思い参加したわけであった。しかし参加してみると自分が思っていたプログラム内容とはいい意味でも悪い意味でも異なっていた。先に悪い意味について言及するとこれは私が集団行動を苦手とする人種であることに起因しており、本プログラムは京都大学だけでなく東京大学・静岡大学も合同で参加しており移動の際は必ず一緒であったため私にとっては苦痛であった。さて“いい意味”に戻り、中国について空港で出迎えてくれたのは浙江大学のボランティアたちで彼らの多くは日本語を勉強していた。そして彼らはほぼ毎日杭州の名所を案内してくれて、私たちが休日の自由時間を使って観光をしたいという交通手段・宿泊場所・名所など様々なことを調べてくれた。これは客人をもてなす文化なのか、ただ単に彼らの優しさなのか分からないが、しかしこのような温かさに触れることはプログラム中少なくなかったので前者であったかもしれない

中国の文化について考えるとき留学前までは偏見・固定観念にとらわれていたので、中国人は声がうるさい、凶々しい、爆買いなどの比較的マイナスの印象しかなかったのだが、実際たったの2週間だけであるのだが住んでみると印象はガラッと変わった。中国人の凶々しさ?いやむしろそれは気迫のように感じて、その気迫は人口最大国の国民がその中で身につけた戦術なのであり、彼らの気迫がある限り中国はさらに発展し続けるのだろうとぼんやりと感じた。また私が中国語の初心者であったということもあるかもしれないが市場や商店で親切な店員にしばしばであった。つたない中国語で値段を聞いたり、値切り交渉を試みたり、味見を頼んだりすると快く反応してくれて(値切り交渉が成功したわけではない)、時には私の発音を直してくれることもあるのだ。実は昨年11月に上海に旅行に行ったのだが、その時との決定的な違いは話しかける言語だ。英語で話しかけると通じないことも多くお互いフラストレーションがたまり会話すら成立しなかったが、今回はコミュニケーションが成り立ったのだ。郷に入るとは郷に従えではないが、英語が完全な言語という幻想は無意味で、ある国を好きになりたいならその国の言語・文化を理解する必要があるのだと実感した。